

研報 07-6

第 6 回 H R C 研究報告会外部評価シート

開催 場所	梅田サテライト	開催 日時	平成 20 年 3 月 1 日 (土) 13:00-16:30
外部評価委員 所属・職・氏名		大阪大学・大学院 マルチメディア工学専攻 教授・薦田憲久	
総 評			
<p>全体的には着実な成果が出て来ているように感じる。効果の大きそうなものから順次実用化に向けて作業を進めて欲しい。中間評価を迎えるにあたって、最終的なまとめ方を視野に入れ、かつ、グループ間の連携も意識した計画の見直しが必要でしょう。特にグループ 4 の位置づけが曖昧。</p>			
グループ 1 評価			
<p>光配向膜において従来問題であった、安定性、配向性を改善し、高プレチルド角を得ることができる技術の開発に目処が立ったことは評価できる。特徴のある領域でのデータの荒さの改善や、新しく導入した側鎖構造による配向性への副作用の評価、必要エネルギーの削減などに取り組んで、デバイスの素材、製造方法として有用な提案をして行って貰いたい。</p>			
グループ 2 評価			
<p>絶対光量測定に関する発表であったが、生成される CO の量と光量の間にはほぼ線形の関係が成り立つようで、面白いところに着目されたと思う。各種パラメータの精度を高めるように最適化するとともに、利用しやすさも備えた光量計としての設計をして欲しい。このテーマはグループ 2 の主目標ではないので、光スイッチング素子、CNT 関連の開発もしっかり進めて欲しい。</p>			
グループ 3 評価			
<p>今回開発されたインジウムチタンと酸化亜鉛を積層したハイブリッド材料で、透過率、抵抗率とも良いデータが出ている。これを価格が高騰している希少金属であるインジウムの使用量を減らす有力な手法の一つとして、太陽電池等への実適用を産業界と一緒に進めて欲しい。</p>			
グループ 4 評価			
<p>光デバイスの社会的影響を調べるということであるが、現在の研究がそれとどう繋がるのか理解できない。H R C の中での位置づけを再検討をして欲しい。研究そのものについては意義あるものだと思うが、明らかになった消費者の意識構造の価値、ならびに提案している分類手法の良さを定量的に示すことが必要。</p>			